



英語で語る世界の医療事情講座

医学部GFL企画プログラム

実施日:2022年12月12日、2023年2月28日、3月20日

実施方法:Zoomオンライン

リーダー:医学部医学科2年 山下宥佳 / 医学部保健学科看護学専攻2年 川島花果(副)



概要

国際的視野を持って将来医療に関わるために、大学院医学系研究科・保健学研究科で学んでいる留学生を通して、世界の医療事情を学ぶと同時に英語力の向上を目的として実施した。保健学研究科の齋藤貴之先生のご協力、また医学部English Cafeのネットワークを活用して留学生を講師として招待し、医学部GFL生を対象に講演していただいた。30分から1時間程度、母国における医療の現状や課題、特徴的な医療システム等についてお話をしていただいた後、質疑応答やディスカッションを通して講師の留学生と交流した。

各回の内容

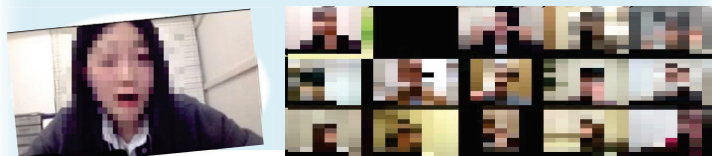
第1回: 12月12日

さん(韓国出身)



韓国は日本と同様に高齢化社会が大きな課題であり、その現状と対策方法を教えていただいた。年齢やADL(日常生活動作)からLTC(Long-term care)に分類することで、その人が必要とするレベルの介護援助を届けられるようにするシステムを学んだ。ケアの一つにbathing vehicle(移動入浴車)があり、日本でも普及すれば介護負担や、風呂場で起こりうる事故を大幅に減らせようかと考えた。

医療事情に限らず、韓国の音楽やドラマ、化粧品等も紹介して下さり、ホットな話題で盛り上がった。韓国と日本の違いという視点から、生活面における異文化交流も出来た。



さん

LTC Services: Institutional care

参加者の集合写真

Home-visit care
Bathing, toileting,
dressing, cooking,
transportation, etc.Home-visit bathing
Professional bathing service
(with bathing vehicle)

LTCのケア内容

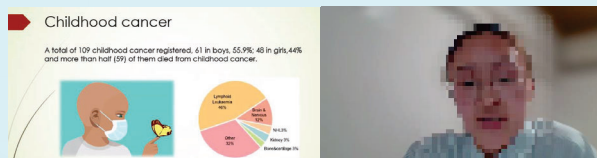
第2回: 2月28日

さん(モンゴル出身)



研究テーマである「Cryoablation treatment(クライオアブレーション)によるがんの治療」に沿って講演をいただいた。モンゴルは肝臓がんによる致死率が高く、世界平均の約9倍を示している。これは、高性能な医療機器がないことや人々の知識の不足のため、ステージ3・4になってから診断される場合が多いことに起因する。がんの早期発見と治療が求められているという医療ニーズを理解した。

一方で、肝炎ワクチンの接種率は98%と高いことや、がんの治療費は100%が保険によって賄われるという点を国を挙げて対策がとられているということが分かった。

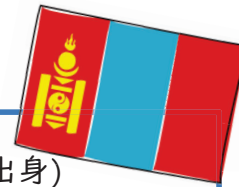


小児がんに関するスライド

さん

第3回: 2月28日

さん(ベトナム出身)



リハビリテーションの需要と作業療法士が不足しているベトナムの医療事情について講義をいただいた。何らかの障害を持つ人に加え、高齢化の進行によるリハビリテーションの需要が高まっている。人口の10%が健康支援を必要とするという「10%の法則」に則れば、990万人がこの医療ニーズを抱えていることになる。

現在ベトナムにいる作業療法士は、日本やインドで博士号を取得した36人と、短期研修を受けた120人だけである。そのため上肢の機能や日常動作、車椅子や認知機能のみに分野が限られており、他分野への拡大が求められている。また、作業療法士の施術のほとんどは保険適外である。教育課程や教員の不足が表面化しており、作業療法学の普及が根本的な課題になっていると理解した。



作業療法士の普及を支持するイラスト



さん

第4回: 3月20日

さん(インドネシア出身)

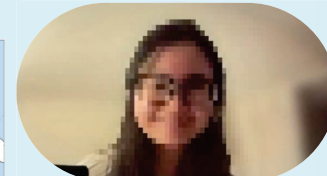


インドネシアでは公衆衛生の面で下水道の整備等において課題があり、感染症の発生・拡大の誘因となっていると学んだ。また、数多くの離島から形成されている国であり移動に時間を要するという特徴から、島の中で基本的な医療を受けるための整備がされていることも理解することが出来た。

90分のうち60分を学生と講師によるディスカッションに当てたことで参加者全員がさんと会話する機会を得ることが出来た。活発に意見が飛び交い、じっくりと議論を交わすことが出来た。



インドネシアの特徴的な地形



さん



参加者の集合写真

総括と今後の展望

保健学研究科の齋藤貴之先生のご協力や、医学部English Cafeのネットワークを生かすことによって、4回それぞれ別の国の出身の留学生を招待し、様々な国の医療事情を学ぶことが出来た。異なる環境における医療の在り方を学ぶことで、自国の医療の理解を深めたり、また見直したりする機会になった。さらに、講座時間の中で活発な議論を交わすことが出来た点で英語力やコミュニケーション能力の向上にも繋がった。様々なルーツを持つ留学生と交流することで、自分の将来について考えるきっかけにもなり、本企画の目的以上に収穫があった。留学生との出会いに加え、同学年のGFL生間の関係が深まったので良いコミュニティ形成としても成果を上げられたのではないかと考える。今後も一人ひとりが他国の医療についての関心を持ち続けたい。

最後に、講演してくださった留学生の皆様、企画を実行するに当たって協力してくださった大学院保健学研究科 川島智幸先生、同 西島良美先生、大学院医学系研究科 葭田明弘先生、笠原様をはじめとするGFL事務の皆様、心より感謝申し上げます。